

日本の季節感—生活文化と伝統工芸

Japanese Seasonal Feeling: Culture of everyday Life and Artistic Crafts

松井 貴子

MATSUI Takako

Abstract: In Japan, four seasons are clear. Spring is the beginning season. People enjoy cherry blossoms in full bloom. In summer, it is very heated, and people seek coolness. Then autumn is harvest season, and people appreciate coloring leaves. In winter, it snows, and people are looking forward to spring coming again. Japanese people take seasonal things into their daily lives. Artistic Crafts, such as tea ceremony utensils, Japanese-style confections, and *kimono* wear express Japanese seasonal feelings. When Japanese people talk of their culture to foreign people, they often mention that Japan's cultural feature is a sensible seasonal feeling, as if they have it. But Japanese people who live in a busy city have a rare chance of feeling the seasonal change of nature. It is laborious even for Japanese people to take over their traditional seasonal feeling. They need to learn it.

Key words: a seasonal feeling, culture of everyday life, artistic crafts, four seasons, nature, a city

季節感、生活文化、伝統工芸、四季、自然、都市

はじめに

外国にはない日本の特徴として、日本には四季があり、日本人は季節感が豊かであるといわれる。例えば、日本について網羅的な記述を試みた『日本文明 77 の鍵』では、季節について独立した項目が立てられ、次のように記述されている。

日本は四季の変化が明確である。また、日本人は自然の変化に敏感な民族といわれ、四季のうつりかわりに応じて、衣装や家具をかえ、旬の食物をあじわい、風景の変化をたのしむといった習慣がある。(註1)

ももとは外国人向けに英語で書かれたものを、日本人向けに日本語で書き直した同書では、同時に、日本の気候について、次のようにも述べられている。

夏と冬のきびしさははげしいものの、一般的に温暖な気候だということができる。そして温暖な気候は、西ヨーロッパや北アメリカ海岸部などと共通しており、産業の発達、文化の向上といった、近代社会の実現のための自然的必要条件のひとつだったのである。(註2)

このようにも書かれた場合、読者は、日本について相対的な視点を持つ方向に導かれるかもしれないが、多くの類書では、他者の存在を意識した視点から書かれることは少ない。それゆえに、日本の季節感について言及されるとき、それが、日本だけの特徴であるかのようなニュアンスを含んでいるように感じられることがある。明確な根拠を示すことなく、当然のごとくいわれることさえあり、そのような記述には疑問を感じる。(註3)

日本の特徴＝日本だけの特徴であると思わせてしまうのは、外国人が見た日本像として、日本人が、例えば、次のように語ることが影響しているのではないかと推測される。

日本はまことに不可解な国である—という感慨を、おおくの外国人からわたしは聞かされた。(註4)

このような日本観は、例えば、次のように記述されている。

異文化の国を訪れた人たちは、目新しいものに触れるたび、案内役や出会った人たちに次々と質問を浴びせかけてくる。豊かで多様な独自の文化を持つ日本の場合、上記のような山ほどの質問が降り注ぐことはしょっちゅうである。(註5)

外国人に理解されない日本＝独特な文化を持つ日本となるのである。しかし、ある事柄が、日本の特徴として認識されたとしても、それが、日本だけの特徴であるとは限らない。日本人自身が、このステレオタイプな思い込みにとらわれるならば、自国の特質を誤解してしまうのではないかと懸念される。

1. 生活文化としての花鳥風月

梅棹忠夫によれば、外国人が見る日本文化の特徴として、「歌舞伎、能、生け花、禅など、まことに優雅な文化的伝統をゆたかにもっている。」(註6) ということがあるという。

外国人に様々な日本文化を紹介するテレビ番組 *Begin Japanology* というシリーズの *The Glory of the Four Seasons* (日本の四季の美、美しい日本の四季) (註7) では、古来、日本で

は四季の風物が生活に取り込まれてきたことが、日本の季節感の特徴であるとされている。

四季の概念は日本以外の国にもあると述べた上で、日本人の特徴は、微妙な自然の変化に季節の移ろいを感じ、四季の風物を生活に取り入れてきたことにあるとしている。それは、和歌に詠まれた花鳥風月、工芸デザイン、季節の変化に応じた様々な行事などであり、伝統文化として現代に引き継がれているという。

日本は四季の変化がはっきりしており、地域差が大きいといわれている。それは、日本列島を南北に山脈が走り、日本海側と太平洋側に分かれること、ユーラシア大陸の東側に位置していることなどの地理的条件により、季節風、梅雨前線、台風など季節特有の変化が見られるためである。

春は命が芽吹く季節である。旧暦では春が新年であり、始まりの季節であった。だから、四季は春から始まる。春には桜が咲き、その開花情報が全国ニュースになる。多くの人々が桜を見に出かけ、木々の下で宴会をする。江戸時代から庶民も楽しんだこの季節行事を「花見」というのは、日本人にとっての桜は、花を代表するものであるからである。

夏には、暑さをしのぐ工夫がなされてきた。滝や川のような水の流れに涼しさを求め、涼しくなる夕暮れには花火を楽しむ。

秋は実りの季節である。米を収穫する重要な季節とされてきた。秋半ばの満月に、団子や薄餅を供えて行なう月見は、豊作祈願の行事である。秋はまた紅葉の季節でもある。日本の山は常緑樹と落葉樹が混在しているため、色とりどりの紅葉になる。そして、日本人は落葉にも美しさを感じる。秋の終わりを示す落葉から、時の流れのはかなさを感じ取り、そこに美を見出すという。

冬には雪が降る。古くから宮廷や幕府では雪見の宴が行なわれた。古今和歌集で、雪を花に例えて歌に詠まれているのは、春を待つ気持ちの現われであるとされている。

そして、日本人が、このように四季の変化に敏感であり、行事とともに四季の移ろいを愛でてきた理由として、稲作との関連が指摘されている。米を主食としてきたため、不作になると飢えてしまうので、季節のわずかな変化にも敏感にならざるを得ず、季節の行事として、稲の豊作を祈願し、豊作に感謝したと考えられている。

日本人の美意識や価値観は季節の移り変わりと密接に結びついている。そこに底流する無常観は、この世は常に移り変わり、永遠のものは何もないという仏教の考え方である。満開の桜は美しいが、数日後には散ってしまう。そこに、日本人は無常を感じる。だから、木々の葉だけではなく、散った紅葉にも美を感じるのである。このように、はかなさや刹那に美しさを感じる感性は、「もののあはれ」と名付けられている。日本が古代中国から摂取した文化が、平安時代に日本化して形成されたもので、以来、千年が経ち、日本独特の美意識となったとされている。

この **Begin Japanology** では、自然と共生する暮らしから、季節を愛でる感覚が磨かれたと言われている。しかし、これは、日本だけの特質であるとは思われない。稲作は東南アジアか

ら日本に伝わってきたものであり、日本の伝統的な季節行事の起源は中国にあるものが多いからである。

季節を意識する感覚が豊かであることは、確かに日本の特徴であるが、日本人だけが、この感覚を持っているわけではないであろう。日本だけが特別なのではない。世界のなかで特定の国だけが異質であると考えるのは、主観的で視野の狭い見方である。それぞれの国が持つ文化の特質は、他文化との同質性と異質性の両面から意識することで、多彩な様相が鮮明になり、より明らかに把握できるようになると思われる。

2. 伝統工芸における季節感

日本人の季節感が活かされた日本文化の代表的なものとして俳句があるが、俳句と同様に、季節感を重視する日本文化として、生け花、茶の湯が挙げられている。

世界でもっともみじかい詩である俳句は季節を題材にし一季題、一句のうちに季節をあらわす言葉一季語をかならずいれるという規則がある。その言葉は、年中行事や花、鳥、虫などで、それが歳時記という辞書のかたちにとめられている。生け花、茶の湯でも、季節感はもっとも重要なテーマのひとつとなっている。(註8)

The Glory of the Four Seasons の後半では、季節感と伝統工芸の関連について紹介され、季節の先取りをすることが日本の季節感の特徴であるとされている。

伝統工芸では、職人の技によって季節感が表現され、生活が彩られてきた。例えば、茶道具、和菓子、着物に、その特徴を見ることができる。

茶道では、季節感が大切にされる。茶室に季節の花を飾り、季節に応じて道具を変えるのである。茶碗、茶器には、春の梅、初夏の竹、秋の菊のように、図柄で季節が表わされ、季節感が盛り込まれる。茶器の焼き物の一つである永楽焼の窯元は、楽しい気分になる器を心がけているという。

現代に続く茶道を大成した利休が、季節感を重視したのは、茶の湯を自然の本質を表現するものであると考えたからである。一輪の花、一幅の絵画をさりげなく飾って季節感を出す。この奥ゆかしさに茶の湯の美意識があるという。

そして、和菓子にも季節感が活かされている。ピンク色の餡で春の桜、透明なゼリーで夏の清流を表わす。秋には、紅葉や柿などの果実、冬には、雪、寒さ、山茶花、木枯らしの吹く山里の初霜などが、菓子の題材となる。茶席に欠かせない和菓子は、このように季節ごとに変えて、職人の手作業で作られる。職人の手加減で、一つの菓子里に自然の風物を映し出すのである。和菓子は、最初に目で食べるものであるため、色彩が一番大事であり、濃すぎるとはいけない。そのために、「ぼかし」の技法で自然な色合いが出されている。日本の伝統的な季節感の特徴である季節の先取りは、和菓子の場合には、数週間ほど早くするという。

日本の伝統的な民族衣装である着物もまた季節感を表現している。

着物の代表的な技法である友禅染は、江戸時代の絵師宮崎友禅齋に由来し、季節ごとの花鳥風月がデザインされている。輪郭に糸目糊を置いて、手描きで染めるため、四季の花の柄をあざやかに描くことができる。輪郭線が白く残ることで、四季の花の形や色を際立たせるのである。友禅流しをすることから、水の芸術ともいわれている。友禅染では、身近な自然が図案となり、花鳥風月として一幅の絵のように描かれること、余白をとって模様を際立たせることが特徴である。

春には、梅、松によって春を迎えた喜びを表現し、夏には、流水模様、蜻蛉など涼やかな柄が描かれる。秋の紅葉が描かれた着物に、流水柄の帯を合わせるのは、和歌に詠まれた紅葉の舞う竜田川のイメージであろう。山茶花の図柄は冬である。

季節を先取りすることは、着物の約束事でもある。例えば、桜柄の着物は、桜が咲く前に着て、桜が満開のときには着ないものとされている。

季節感を先取りして着用する着物の柄と季節の関係について、着物の染色の専門家は、例えば、桜文様の着物や帯ならば、「その地域の開花を考えて、少しばかり早めから用いるようにします。」(註 9) と述べ、「その土地の花の終わり頃には、もうしばらくという思いを包んで仕舞うほうが潔いおしゃれでしょう。」(註 10) という考えを表明している。

また、ある着物ジャーナリストは、「桜便りが耳に入ると私は桜のきものに手を通します。」(註 11) と述べ、「桜の柄は、春分前から弘前の桜が散る五月中旬までの二か月間存分に着て楽しむことができます。沖縄の桜から着始めると三か月間です。」(註 12)、と、地域差を含めた季節感を表明している。秋についても、「紅葉の柄のきものや帯は、十月の霜降あたりから立冬までの間に着るようにしているのですが、その年によって紅葉の季節が定まらず、小雪くらいまではいいかと思っています。」(註 13) と述べている。

生活のなかの自然物という視点で見ると、日本人の自然の楽しみ方には、二通りあると考えられる。一つは、外へ、自然の中に出かけて楽しむもので、花見、探梅などである。もう一つは、人工物に自然を図案化して楽しむもので、茶器、和菓子、着物などがある。生活の中で使うものに自然を取り込むことは、時間とともに移りゆく自然を自分の身近に留め、好きなときに楽しむことができるようにすることである。

しかし、このように自然物を生活に取り入れることは、日本人だけが楽しんでいることではない。例えば、北欧のノルウェーでは、見事に細工された花のマグネットが売られていた。冬の室内でも花を楽しむ工夫である。日本から見れば、ノルウェーは異国であり、北欧文化は、全体としては、異文化として認識されるであろう。それでも、このように、工芸品によって、生活のなかに自然を取り込むことにおいては、日本との異質性よりも、同質性の方が強く感じられる。この感覚は、異文化を受容し、親しみを持って他文化を理解することを助ける。

おわりに

日本人は季節感が豊かであるとされている一方で、現代の都市生活では、季節を感じるものが薄れているとも指摘されている。その理由は、慌ただしい生活で、心のゆとりがなくなっていることにあるという。秋に鳴く虫の音を美しいと感じて、しみじみと味わうことができるのは、日本人独特の感覚であるといわれているが、私は、鉄筋コンクリートの建物に囲まれた空間で虫の音を聞いたとき、美しいはずの虫の音を喧しいと感じたことがある。一度きりの経験であったが、都市生活が感覚を疲弊させ、狂わせてしまうことを、確かに実感した。

都市で生活していると、街中の公園や街路樹、人工的に作られた植栽など、限られた自然物に接して季節を感じるようになる。それ以上に季節を感じさせるのは、コンビニエンスストアで見かけるような商業主義と結びついた節分の恵方巻やバレンタイン、クリスマスなどの行事関連のもの、寒くなると売られるおでん、スーパーマーケットで売られる正月飾りや七草かもしれない。ハウス栽培の作物と露地栽培された旬の野菜や果物を区別して購入することなど、ほとんどないのが実情であろう。

日本人の美意識の根底にある、季節に対する豊かな感受性を失ってほしくないと、**Begin Japanology** では語られていたが、日本人が豊かに持っていると思われる季節感でさえ、ただ日本に生まれ育っただけでは身につけることはできない。相応の学習が必要である。明治時代以来の近代化を経て、生活様式が変化した現代において、何もしないで、伝統的な美意識を継承することは難しくなっているのである。

註

註1 小山修三「3 四季」『日本文明 77 の鍵』23 頁

同様の内容は、次の文献でも詳述されている。

小池三枝・柴田美恵『日本生活文化史—近現代の移り変り』2002・3 光生館

—小池三枝「はじめに」 i — ii 頁

—小池三枝「第一部 近代化の歩みと日本の美 III. 日本の生活と美」

「1. 四季の移ろい」 59—65 頁

「2. 音と静けさ」 65—70 頁

「3. 『陰翳礼讃』を読む』 70—75 頁

とよざき ようこ、スチュウット ヴァーナム—アットキン『ニッポン風物詩』 *Are Japanese Cats Left-handed?* 2008・5 IBC パブリッシング

—「歳時記 春」 ‘Seasonal Features Spring’ 143—163 頁

—「歳時記 夏」 ‘Seasonal Features Summer’ 166—211 頁

—「歳時記 秋」 ‘Seasonal Features Autumn’ 212—225 頁

—「歳時記 冬」 ‘Seasonal Features Winter’ 227—285 頁

註2 小山修三「3 四季」『日本文明 77 の鍵』27 頁

註3 日本文化を単独にはなく、多文化のなかでとらえることについて、次の拙稿で考察し

た。

宇都宮大学国際学部編 下野新聞新書 9『世界を見るための 38 講』2014・11 下野新聞社
 一松井貴子「第 16 講 日本を意識する—世界の中の日本、多文化を知り、日本を
 発信する」89—94 頁

宇都宮大学国際学部編 下野新聞新書 12『多文化共生をどう捉えるか』2018・10 下野新聞
 社
 一松井貴子「日本で考える多文化共生—多文化の現実、共生という理想」52—57
 頁

註 4 梅棹忠夫「まえがき」『日本文明 77 の鍵』6 頁

註 5 「はじめに」『ニッポン風物詩』4 頁

日本の季節感は独特であると強調した記述が、例えば、次の文献に見られる。

Reed, Robert, *Finding Japan: A guide to seeing its beauties and unlocking its
 mysteries*, 2005・9 Jリサーチ出版

—'Introduction' 12—15 頁

—'Japan's Four Seasons, their beauties and trials' 「四季」90—97 頁

註 6 梅棹忠夫「まえがき」『日本文明 77 の鍵』6 頁

註 7 The Glory of the Four Seasons (日本の四季の美、美しい日本の四季) Begin
 Japanology 2009・2・23 日 NHK総合

註 8 小山修三「3 四季」『日本文明 77 の鍵』23 頁

註 9 木村孝「桜のおしゃれ」『美しい着物、美しい人 伝えておきたい嗜みごと』34 頁

註 10 木村孝「桜のおしゃれ」35 頁

註 11 中谷比佐子「三月のお洒落」『おしゃれなきもの教室 十二か月のきもの』24 頁

註 12 中谷比佐子「三月のお洒落」24 頁

註 13 中谷比佐子「十一月のお洒落」56 頁

資料一覧

梅棹忠夫編著 文春新書 435『日本文明 77 の鍵』2005・4 文藝春秋

とよざき ようこ、スチュウット ヴァーナム—アットキン『ニッポン風物詩』Are Japanese
 Cats Left-handed? 2008・5 IBC パブリッシング

Reed, Robert, *Finding Japan: A guide to seeing its beauties and unlocking its mysteries*,
 2005・9 Jリサーチ出版

The Glory of the Four Seasons (日本の四季の美、美しい日本の四季) Begin Japanology
 2009・2・23 日 NHK総合

木村孝『美しい着物、美しい人 伝えておきたい嗜みごと』2008・11 淡交社

中谷比佐子『おしゃれな着物教室 十二か月のきもの』1999・10 世界文化社

- 小池三枝・柴田美恵『日本生活文化史—近現代の移り変り』2002・3 光生館
- 宇都宮大学国際学部編 下野新聞新書9『世界を見るための38講』2014・11 下野新聞社
- 宇都宮大学国際学部編 下野新聞新書12『多文化共生をどう捉えるか』2018・10 下野新聞社
- 鈴木充広『暮らしに生かす旧暦ノート』2005・8 河出書房新社
- 新谷尚紀監修『季節の行事としきたり』2007・12 毎日コミュニケーションズ
- 新谷尚紀監修『和ごよみと四季の暮らし』2007・1 日本文芸社
- 中西利恵監修『おうち歳時記 和の暮らしが楽しい!』2007・1 成美堂出版
- 三浦康子監修『なごみ歳時記 もっと!暮らしのしむ』2007・3 永岡書店
- 神崎宜武監修ニューミレニアムネットワーク編『日本のしきたり 冠婚葬祭・年中行事のなぜ?』2008・3 ダイヤモンド社
- 高野紀子『「和」の行事えほん ① 春と夏の巻』2006・6 あすなろ書房
- 高野紀子『「和」の行事えほん ② 秋と冬の巻』2007・10 あすなろ書房
- 復本一郎監修『俳句の花図鑑』2008・2 成美堂出版
- 『四季の図譜』(『新日本歳時記』特別編集)2008・10 講談社
- 川浦良枝『しばわんこの和のころ』2002・1 白泉社
- 川浦良枝『しばわんこの和のころ2—四季の喜び』2002・12 白泉社
- 川浦良枝『しばわんこの和のころ3—日々の愉しみ』2002・1 白泉社
- DVD「しばわんこの和のころ」ふわり春編 2007・4 NHK エンタープライズ
- DVD「しばわんこの和のころ」初夏の香り編 2007・1 NHK エンタープライズ
- DVD「しばわんこの和のころ」空高し、秋編 2007・1 NHK エンタープライズ
- DVD「しばわんこの和のころ」冬は楽しく編 2007・4 NHK エンタープライズ